児童・思春期精神科病棟での親子支援場面における父親の果たした役割

船越明子(兵庫県立大学)、浦野茂（三重県立看護大学)、
土田幸子（鈴鹿医療科学大学）

【緒言】児童・思春期精神科では、入院中にゲームや料理などの親子活動を取り入れることで、親子関係のアセスメント、親との関係づくり、実際の活動場面でのアドバイスを行う個別的な親子支援プログラムが注目されている。本研究の目的は、児童・思春期精神科病棟での親子支援場面の相互行為を記述することによって、支援者と親が相互理解を得るために果たした父親の役割を明らかにすることである。【方法】児童・思春期精神科病棟での看護師による個別的な親子支援プログラムを実施している施設において、親子支援場面の参加観察とビデオ撮影を実施した。対象となった子どもは１名（Ａ君）で、６回の親子支援プログラムが実施され、前半３回は参加観察、後半３回はビデオ撮影を行った。フィールドノートおよび録画データをもとに、親と看護師の相互行為についてエスノメソドロジー的分析を行った。また、親と看護師へのインタビュー調査を実施し、親子支援の意図や主観的な効果を分析した。Ａ君とその両親・担当看護師に対して、研究の主旨、匿名性の確保、結果の公表、調査への参加は自由意志であること、研究参加への有無によって不利益を被らないことを口頭と書面で説明し、研究協力に対する同意書を得た。個人を特定できる情報は、電子化しパスワードを設定した状態で、研究代表者が一元管理した。録画データは、専用の外付けハードディスクに保存し、施錠可能な収納棚に保管した。また、三重県立看護大学および対象施設の倫理委員会による承認を受けた。【結果と考察】A 君は、自閉症スペクトラム障害と診断された中学生で、盗癖を主訴として入院治療を行っていた。看護師との相互行為を通してＡ君の行動に対する親の対応を変える必要性に気づいた母親が、父親のプログラムへの参加を求めた。Ａ君の行動の意味とその対応を父親も理解する必要があるという看護師と母親の共通認識のもと、父親がプログラムに参加することとなった。父親は、看護師との対話やA 君とのゲームを行うことで、父子関係の改善が必要であることを認識するに至った。「子の行動について知識を欠く」人物としてプログラムに参加することになった父親は、この参加を通じてＡ君の行動について知識を獲得していくことにより、Ａ君への支援のための「キーパーソン」となっていった。プログラムに対する父親のこうした参加の形式とその意義について、この報告では検討する。